

2021年11月5日 第3368回例会

於： 横須賀商工会議所



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

<点鐘・開会> 12:30 八巻 会長

<斉唱> 「君が代」「奉仕の理想」

<唱和> 「四つのテスト」

<ゲスト紹介> *米山奨学生 朴 恃彦 様

<ビジター紹介> *大村ロータリークラブ 竹房政美 様

<誕生日祝> *越川昌光 (S.22.11.3) *長尾和典 (S.31.11.3)

*中島洋 (S.46.11.3) *前川静子 (S.19.11.3)

*堀川敏毅 (S.43.11.3) *佐久間博一 (S.19.11.7)

*外木祥司 (S.27.11.7) *田村 督 (S.47.11.14)

*Wosti Loknat (S.45.11.15) *齋藤 慎太郎 (S.30.11.23)

*澤田菊江 (S.16.11.24) *来生 亮 (S.54.11.26)

<入会月祝> ・新倉定治 ・兼城 毅 ・鈴木之一 ・臼井 健 各会員
 ・比護友一 各会員

<会長報告> *ガバナー事務所より

・2021-22年地区大会親睦ゴルフコンペのご案内について
 2022年2月28日(月)

場所：レイクウッドゴルフクラブ東西コース (中郡大磯町黒岩169)

52組208名予定 コンペ参加費用：3,000円

プレー代金：17,700円(昼食別)

・クラブフューチャービジョンセミナーのご案内について

12月4日(土)13:00~17:30

場所：相模原市産業会館1F または ZOOM

<委員長報告> *雑誌委員会 椿委員よりロータリーの友11月号

*出席委員会 加藤 勲 委員長より10月出席報告 10月分平均出席率 77.35%

	会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メイクアップ数	出席率
10月1日	118名	106名	75名(13名)	31名	4名	74.53%
8日	118名	110名	82名(10名)	28名	2名	76.36%
15日	118名	108名	84名(58名)	24名	1名	78.70%
22日	118名	112名	91名(8名)	21名	1名	82.14%
29日	119名	108名	79名(12名)	19名	2名	75.00%

<幹事報告> *第2期会費納入のお願い

<米山奨学生へ奨学金授与>

<出席報告> *出席委員会 加藤 勲 委員長より11月5日の出席報告

会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メイクアップ数	出席率
118名	112名	90名(11名)	22名	4名	83.93%

<ニコニコ報告>

- ・竹房政美様(大村RC) 長崎県の大村RCより参りました。15~18歳までを武山の少年工科大学で過ごしました。何度来ても横須賀の街並みは懐かしいです。
- ・三 役 ビジター大村ロータリークラブ 竹房正美様、ゲスト米山奨学生 朴 恃彦様、ようこそおいで下さいました。本日の例会をお楽しみ下さい。
- ・岩崎、佐久間、木村 各会員 本日のゲスト米山奨学生 朴 恃彦さん、お忙しい中ようこそお出で下さいました。本日の例会をお楽しみください。
- ・山下、兼城、小山 各会員 本日のビジター大村ロータリークラブ竹房正美様、遠路はるばる

ようこそ横須賀RCにお越しくださいました。例会をごゆっくりお楽しみください。

- ・越川、長尾、前川、堀川、佐久間、外木 各会員 誕生月祝いとして
- ・新倉 健、兼城 両会員 入会月祝いとして
- ・三 役 笠木会員、堀川会員、本日の新会員卓話よろしくお願ひいたします。
- ・岡田 健、加賀本、小山 健、田中 健、新倉 健、江口、畑、鈴木 健、飯塚、椿、福西、徳永、松本 健、勝見、立石、上林、鈴木 健、鷺尾、長尾、前川、江沢、濱田、猿丸、勝間、谷、後藤、齋藤 健、藤村、野坂、鹿島、根岸、渡邊、杵渕 各会員
笠木会員、堀川会員、本日の新会員卓話、楽しみにしています。
- ・笠木 会員 卓話やります。我慢してお聞きください。
- ・堀川 会員 新会員卓話、させていただきます。よろしくお願ひします。
- ・大石、長谷川、加賀本、角井、中村 健、小平、新倉 健、福西、加藤 健、濱田、北村、小保内 各会員

11月7日(日)はポリオ根絶募金活動が横須賀中央駅、京急久里浜駅、追浜駅で催されます。天候に恵まれ実施できそうです。みんなで参加しよう！

- ・梁井、前田、齋藤 健、五十嵐、宮島、田中 健、小佐野 各会員
11月4日(木)割烹住よしにて8番テーブルミーティングが開催されました。三役、三宅様にもご出席頂き、久しぶりのテーブルミーティングを楽しむことができました。参加頂きました皆様ありがとうございます。十四代美味しかったですね。
- ・小山 健 会員 昨日の8番テーブルミーティング、参加できずにすいません。反省しています。

<新会員卓話 1>

笠木英文 会員

皆様こんにちは。本日の卓話をさせていただき笠木英文と申します。よろしくお願ひ致します。

私は、4分の3横須賀人です。祖母は横須賀の松原の人でした。祖父の生まれは加賀の金沢ともいわれます。その間に生まれた父はハーフヨコスカンであり、オッパママの母との間にうまれた私は4分の3ヨコスカンというわけです。

左の絵は、祖父・笠木治郎吉が、若かった頃の祖母を描いた水彩画で、2019年9月に府中美術館で開催された“お帰り美しき明治”展で大きく取り上げられました。また本年9月からは京都国立近代美術館で行われた“発見された日本の風景 美しかりし明治への旅”でも、笠木治郎吉の水彩画がクローズアップされました。

左の写真は横須賀の私立学校への進学を目指した三人組です。真ん中は神童ともいわれた秀才の小田和正君で、自由な気風の横浜の私学に進学し、その後の人生は大きく広がっていきました。一方凡才の2人は横須賀の私学で勉強ばかりの学生生活を過ごしました。『人間万事塞翁が馬』ですね。

我が家は経済面でも横須賀に助けられました。祖母と父が相次いで他界し、31歳で未亡人になった母は3人の子供を育てるためにベースの前にあった小さなスタジオで主に米兵の家族や恋人の肖像画を描いて生計を立てていました。一方親の苦勞も知らずに、私は大学から始めたバンドに夢中になりました。このバンドは足手まといのベース担当の私にもかかわらず、1968年のヤマハライトミュージックコンテスト関東大会で優勝し、全国大会では準優勝となりました。また翌年は小田和正がフォーク部門で2位になり音楽界に進みます。

横浜の大学を卒業後、海外に行きたい夢があった私は、輸出の盛んな中小自動車メーカーだったホンダを選びました。1980年代、ホンダはいち早くオハイオ州に工場進出しました。英語が話せる人は殆どいなかったの、やる気があって体が丈夫であれば誰でもいけました。仕事も順調で調子に乗っていた私は、しばらくすると思わぬ事件に巻き込まれてしまいました。ある朝工場に出勤すると「部下の黒人女性が私から暴力を受けたので訴えてきた。」というのです。私には身に覚えがないのですが、結局一週間後に家族を残してカナダに新設された工場に着の身着のまま移動する羽目になりました。その後カナダに5年家族と滞在し、優しいカナダ人に励まされ、仕事も生活も立て直すことができました。サプライズは日本に帰国してから起きました。突然、上司より、購買本部の部長を受けろという要請でした。“人間万事塞翁が馬”の諺をしみじみ思い出しました。



どんな時にでも支えてくれる人がいるのは有難いものです。左の写真は私が事件から25年ぶりにコロンバスを訪れた時に元の部下たちが開いてくれたパーティです。私のセクハラ事件の話題で大変盛り上がりました。右の写真は45年入社の同期会です。この中には、世界最高峰のF1レースで16戦15勝の偉業を成し遂げた時の監督の市田勝巳君や、横須賀高校出身でアスモやホンダジェットの開発を支えた元本田技術研究所所長の荒木純一さんもいます。ここでも私のセクハラ冤罪事件が面白可笑しく酒の肴にされました。

そんな企業人生活も定年退職を迎え、いつの間にか私は画廊という第二の人生に引き込まれていくのです。私は、画廊というのは自ら画家を発掘し、その絵を売ることによって収益をあげ、その収益で画家の成長をサポートしていくというサイクルを回していく仕事だと定義しました。小さい画廊ですが、夢は大きく、志の高い画廊でありたいと思っています。ニューヨークやインドのニューデリー近郊でも展覧会を開きました。いずれも輸送費や税金でずいぶん金を費やしてしまいました。しかしインドは絵画においても将来性があるマーケットなので、過去の失敗を反省して再度チャレンジしていきたいと思います。そんなご縁もあり、2019年には、駐日インド大使ご夫妻が鎌倉のギャラリーにお越しくくださったこともあります。

私には、海外に散在している祖父笠木治郎吉の絵を探すという使命があります。明治から大正にかけて横浜で活動していた祖父・笠木治郎吉の絵は、ほとんどが関東大震災や戦火で失われましたが、当時海外から訪れた欧米人が祖国に持ち帰り、今でも多く存在しているはず。それらを探し当てる仕事にはロマンがあり、先祖への供養にもなると思っています。

最後に夢をかたります。私の夢は、猿島を丸ごと世界に誇れる美術島にすることです。きっかけは、2011年にベルギーのアントワープにあるバーフ大聖堂でみたファン・アイクの“神秘の子羊”の祭壇画です。昼でも薄暗い中世カトリック教会に僅かな蝋燭の光でも幻想的に浮かびあがる美しい絵に、私は息を飲みました。それから数年経った2016年、石川県立美術館で開催された能島義史の展覧会は衝撃的でした。美術館の壁をすべて黒布で覆いそこに展示された絵に小さなスポットを当てると液晶テレビの画像のように浮かび上がる美しい絵に不思議を感じました。

2018年5月、かさぎ画廊は、漆黒展示の魅力をもさらに追及するため横浜三溪園の重要文化財(旧)燈明寺本堂にて能島義史による宇宙船かぼちゃ号展を企画開催しました。能島義史は修得したフランドル技法を更に展開し、現代にベルギーのバーフ大聖堂の暗闇に浮かぶ“神秘の子羊”の宇宙を再現したのです。翌年2019年11月に横須賀猿島にて“感覚の島 暗闇の美術島”というイベントが行われました。「自然島猿島でアートを通じてわれわれが失ってしまった感覚を呼び戻す」というのがコンセプトでした。ここから得

たインスピレーションから、暗闇から発する新たなスタイルの美術を発展させ、世界に発信するメッカとし
“猿島 BLACK MUSEUM”を誕生させたいと思いました。“猿島 BLACK MUSEUM”のコンセプトは【・サ
ステナブルであること ・世界でオンリーワンで最先端のアートであること ・横須賀と猿島のリソースを
最大発揮すること ・美術と自然の共生を図ること】であってほしいと思います。

<新会員卓話 2>

堀川 敏 毅 会 員



自己紹介をかねて今までの自分のことについてお話ししたいと思います。

私が生まれたのは川崎ですが、小学校入学の時に横須賀に引っ越しまして、栗田小、野比中、横須賀高校と進みました。そこまでは何の変哲もない人生だったのですが、そこからちょっと変わりました。1年浪人しました。その浪人したのが親の転勤のため広島だった関係で、予備校の先生の言われるままに九州大学に進みました。そこが人生のターニングポイントの一つと思っています。

大学ではアメリカンフットボール体育会をやっていました。卒業するにあたり就職を何処にしようかと言うことを考えました。当時はバブルの1番最後の年で、私が就職したのは平成4年なので、どこでも行ける。体育会の先輩は当時銀行とか商社とかに主に就職していましたが、私は文学部だったこともありまして、福岡に本社があります西日本新聞社という新聞社に記者として入社しました。

普通記者ですと警察回りから始まり、行政とかいろんなところも回るのですが、私の場合は同期入社24人中で唯一スタートが運動部、スポーツの担当部署に配属されました。それから新聞社に16年勤務したのですが、その途中で整理部という紙面編集の部署があつて、4年間だけ整理部に行った以外は全て運動畑で過ごしました。

最初は九州のアマチュアスポーツを担当して、甲子園にも行きました。その後、ちょうど城島がダイエーホークスに入団した年には主にダイエーの2軍の担当をしておりました。当時城島が入団して直後、足首を怪我しまして2軍でスタートだったのです。城島とは練習の時に仲良くなりまして、福岡ドームまで車でよく送ったのを覚えております。彼は覚えているかわからないですけど、それで入社して4年経ったときに東京運動部に配属になりまして、そこで1996年、巨人の担当になりました。ちょうど長嶋監督の時で、96年のメイクドラマと呼ばれた長嶋監督の優勝した年です。そのとき運良く担当させていただきました。巨人の優勝原稿を書かせていただきました。97年98年は西武ライオンズ。97年はちょうど清原が抜けた後の西武で、全く注目度がなかった時ですね。かつての黄金時代を背負った選手たちは、もうだいぶベテランで、清原が抜けた後で、各社担当記者を今まで複数をおいていたのが、一人になってしまったところでした。私も若かったのですが、よく覚えているのは、当時まだ新幹線に食堂車がついていまして、監督は東尾さんだったのですが、東尾さんも多分注目度が非常に下がっていたことをすごく寂しく思っていたのですね。例えば東京から大阪に遠征の時に、新横浜あたりで「食堂車にみんな集まれよ」と広報から電話が来まして、監督が飯食うからということよく食堂車に呼んでいただきました。そこで、東尾さんを囲んで、当時一緒に来ていた記者が4、5人ぐらいでしたけど、よくお昼ごはんを食べさせてもらって、ビールを出していただいて、いろいろ話を聞きました。当時はプロ野球担当というのはネタがないと書けない。試合の日は良いのですが、移動日とか練習の日の原稿が非常に難しい。今でも覚えています。西武ライオンズの西武球場。オフシーズンの時が1番苦しくて、球団事務所にずっと朝から詰めているのですが、練習に来る選手もいない、コーチ陣も誰も寄り付かないという時に、毎日なにか原稿を出さなくちゃいけない。本社のデスクに電話する時間がだいたい午後4時ぐらいで決まっているのですが、その時の電話で何も報告することがないということが非常に多くありました。あの時のことを思い出すと胃が痛くなります。

ただ、新聞社は全体的にはまだ良い時代で、西日本新聞も当時85万部ぐらい紙が出ていました。この前、週刊ダイヤモンドでだいぶ特集されていましたが、今は40万部ぐらいに減ってしまっているということで、非常に時代が変わったなということを実感しております。

あと新聞社時代で2006年にサッカーを担当させていただいて、ワールドカップドイツ大会で約2ヶ月ドイツに行かせていただきました。ちょうど日本代表はジーコで、中田が最後のワールドカップだったので、1次リーグ最終戦でブラジルに3対1で負けてしまいました。中田がその試合が終わった後にピッチにずっと寝転がっていたシーンを覚えていらっしゃる方もいるかもしれません。あの時非常に運がよく私も現地に行かせていただいていた。その大会では結局日本は成績が思わしくなくて予選敗退でしたが、会社から帰って来いって言われるかと思っていたのですが、何も言われなかったので決勝まで引き続きドイツに滞在させていただいたというのは、非常に思い出深く残っています。

就職するときは九州でずっと過ごすという頭があまりなくて、その後も横須賀で育ったということを普段の生活であまり気にしなかったのですよね。西日本新聞社は九州の新聞社だったので主に取材対象は九州の方ばかり。なので、自分がもう半分九州人だという感じでずっと行動をしていました。ただ40近くになりまして、やはりこっちに帰ってきた方が良いのかなという気持ちがだんだんと出てきました。そこで40の時に思い切って、新聞社を退職しました。40からの転職だと難しく、自分で独立できる職業が良いかないということで、簡単な気持ちで税理士を選ぶのですが、それから8年ぐらいかかってしましまして、ようやく2016年に資格が取れました。新聞記者から税理士ということで、皆さんから色々言われるのですが、僕自身は実際やってみてあまり違和感がありません。なぜかというと、税理士の仕事の内容については、偉い先輩がいるのでここでは特にお話するつもりはありませんが、税理士もずっと計算ばかりやっているわけじゃないことはご存じのとおりです。お客様に対する対応が中心だということで、そういう意味では新聞記者時代の経験が非常に活かしている。新聞社の時は取材に行くところかという感じが多かったです。これは非常にやりがいがある最高の職業だと今思っております。今53で、つい2日前に誕生日で53歳になったんですけど、この後ぐらいいは地元のために、横須賀出身ですので地元のために何かできないかという気持ちも非常に大きく思っております。引き続きよろしくお願いいたします。

<閉会・点鐘> 13:30 八巻会長

週報担当 上田博隆